

令和5年度第2回「岐阜県木の国・山の国県民会議」議事概要

日 時：令和5年11月21日（火）14：50～15：25

場 所：下呂総合庁舎 5-1会議室

議題1

■意見交換会

【田口委員】

国の方では、スギの人工林を10年間で2割ほど伐採し、無花粉スギ等への植え替えを目指すという話があるが、今日、聞いたところでは無花粉スギの苗がまだ実用段階ではないということで、国の計画に苗の開発や出荷が間に合うのか不安に思った。

【高橋委員】

現在は、獣害がひどく、ヒノキを植えることができる山はほとんどなくなっている。

下呂市は先ほど説明のあったとおり、県下の他の区域への配布が可能なⅡ区なので、岐阜県としては下呂市の育種場の整備によって、先手を打つことができていると思われる。

ただ、実売価格からすると、設備の費用や人件費を踏まえると赤字なのではないかという印象。しかしながら、必要な設備であるし、岐阜県の林業を下支えする産業であるため、県でフォローし、盛り上げていてもらいたい。

【駒瀬委員】

岐阜森林管理署管内ではスギを植えることがあまりなく、ほとんどがヒノキであるが、国も補正予算の関係もあり、無花粉スギ、少花粉スギへのシフトを進めているところ。

本日、ドローンの話があったが、ドローンによる苗木運搬については、植え替えを今後進めていくにあたっては、重要になってくるのではないかと感じた。ドローンによる運搬は、効率がよいが、まだ始まったばかりであり、オペレーターは必要であることから、今後、トータルで考えて検証していくことが必要。

【岩井委員】

とてもシステムティックで、人が少ないことに驚いた。重労働が少なく、女性が多いというのは、今までの林業と違う印象で、社会的にもPRができるのではないかと。

若い林業の担い手は自分の仕事分野のことしか知らないという人もいる中、今回視察したような山ができるスタートの部分や県の取組みを、そういった林業を目指す若い世代に見せることができたらいいと思う。

また、ドローンの活用によって運搬方法に進展がみられる中、岐阜県は岩が多いというイメージであるため、現場で植える人の助けとなるような改良も今後されていくとよいと感じた。

【伊藤会長】

今、システムティックという言葉が出てきたが、工業や農業と比べると林業はまだシステムティックと言いがたいのが現状。ただ、どこまでシステムティックにできるのか、すべきなのかというのは難しい問題である。

無花粉スギも、これから苗を作って植え付けていくには非常に長時間かかるが、それが必要かどうかは社会の情勢によって変わってくる。そのタイムラグに翻弄されることなく、どういったところを目指していくのかによって、機械化する部分とそうでない部分と色々なパターンを作っていく必要があるのではないかと考えている。

従来、クローン苗をつくっていたと思うが、将来、どのような棲み分けになっていくのか。従来のやり方と将来的な技術とそれを受け止める社会の在り方の中で、どういったところを目指していくのかは非常に難しいと思う。

(古沢森林経営課長)

少花粉スギの苗については、今年の春、岸田首相が「花粉症対策をする」ということで対策が打ち出されているところ。来年度に向けた方針としては、スギ人工林の伐採、植え替えの加速化、花粉の少ない苗木の生産拡大、スギの需要拡大といった内容を打ち出している。

県としては、種子の生産を担っており、本日見ていただいたような施設に販売し、苗木の生産をしていただいている。少花粉や特定母樹のスギを増やしていくという国の方針がある中で、県としても種子の増産を図っていきたくて考えている。国は10年後に花粉の少ない苗木の生産を9割にすると言っているのだからそれに近づけるように白鳥と下呂と東濃の育種場で、種子の生産を進めているところ。

苗木の生産者は過去と比べると減っているところであるが、施設の整備など県が支援し、生産体制の拡充をしていただいている。県の苗木生産の9割くらいが本日見ていただいたようなコンテナ苗となっている。県が販売する種子は昨年度、6割程度が少花粉スギの種子となっている。ただし、苗木の生産については、県外から種子が入ってくることもあり、少花粉は3割程度となっている。県としては来年度以降、苗木の生産拡大に向けて、施策を展開していきたい。

また、コンテナ苗の価格については、補助事業の標準単価に定めている。Ⅱ区、Ⅲ区といった地区の棲み分けも漏れがないように体制の整備を進めていきたいと考えている。

(石田林業経営改革室長)

ドローンについては、初期投資も維持費もそれなりのコストがかかっているところ。県としては、ICT化の支援ということでドローンのレンタルも補助しており、苗木運搬のために使用された例もある。現場作業員の労働負荷がかなり軽減されると好評の声をいただいております、今後も活用を進めていきたい。

【伊藤会長】

少花粉スギの形質は、すでに検証されているのか。

(石田林業経営改革室長)

既に植えられている木の中で選りすぐっていることから、基本的に今まで植えている苗木と形質は変わらない。

【伊藤会長】

ある特定の目的に向かって進んでいったところ、逆風が吹くということもある。スギは特に地方性も高く、少花粉という一つの目的に向かっていく中で、中長期的にみたときに不利を被ることがないかは心配である。そういった懸念が現実になったときに耐えうるように、林業として明確な全体像が必要ではないか。

(石田林業経営改革室長)

昔、石徹白スギを製材すると黒い斑点ができて、昔は見栄えが悪くと言われていたが、成長がよく今は問題視されないという例もある。中長期的な視点は中々読めないところがある。

【田口委員】

千葉県のサンプスギは少花粉であるものの、折れやすいということが判明している。やってみた方がいいが、数十年後には全滅という可能性があることを考えると、一つの目的に特化していくということは怖さがあると思う。

【伊藤会長】

対処療法としての花粉症対策が進んでいる中、中長期的にみたとき、無花粉にこだわる必要があるのかという時代になったらどうなるのか。そういったハシゴが外されるのが怖いという印象。

【田口委員】

国土の大切な資源であることから、見切りで施策を進めてことは危ういと感じる。

【伊藤会長】

合わせる部分は合わせるとして、したたかにやっていくことも必要ではないか。

(古沢森林経営課長)

少花粉スギの品種は147品種あることから、特定のものに偏ることにより生じるリスクがないように組み合わせさせてやっていきたい。

【駒瀬委員】

スギの植え替えを進めていく一方で、これからの時代はスギだけでなく、広葉樹を含めた多様性が重要になっていく。天然林も入れながら、面的に保全を含めた形の林業が今後は求められてくるのではないか。

【岩井委員】

一口に林業と言っても木を伐る仕事と植える仕事に対するそれぞれのイメージは異なり、植えたいという人は移住志向の人も多い印象。いざ造林会社に入ってみると地拵えや刈払いが大変で思っていたイメージと違うとなる人が多いが、植えるということに対して関心が高まっているように感じている。

(古沢森林経営課長)

岐阜地域の事業体では、植える人が集まらないという声を聞いている。植えたいという方がいるのであれば、そういう方をうまく使っていければと思う。

【岩井委員】

地拵えや刈払いという作業の大変さを理解できていない人も多い。一方で、そういった作業に達成感があってハマる人も多いという印象を受けている。

【伊藤会長】

森林保全活動みたいなボランティアの世界では、植えたいという人の方が多い。プロ的な視点では、植えるだけでは作業賃だけで、直接的にすぐに経済的価値を生み出すわけではない。

しかし、植える森づくりが経済的価値をつくりだすことができると面白いと思う。たとえば、景観づくりや森林サービス産業の基盤づくりとしての森づくりといった、従来、生産物を生み出さなかったものが価値を生み出すような業態、プロとして「植える」世界に参画できるような業態ができるとよいのではないか。

【岩井委員】

林業への入口としての造林という形になるとよいと思う。

【駒瀬委員】

現在は、伐採事業を志す人が造林事業を志す人より多い印象。やはり造林の方が「労働が大変」というイメージがあり、中々来てくれない。

「新しい林業」という言葉があるが、できる限り作業の効率化を目指していく、労働力が限られているため省力化して労働負荷を減らしていくこと、また、林業従事者の地位を向上させるということも重要であると考えます。

【伊藤会長】

労働環境をよくしていくことと同時に社会的価値を高めていく必要があるし、それを子どもたちに伝えていくことが重要ではないか。

【高橋委員】

現場では、担い手の確保が一番大変であると感じる。ICT化しても人は必要であり、持続的な林業経営には、新しい人を入れることが必要。奈良県ではフォレスターアカデミーという学校があり、実践的な現場技術者を養成していると聞く。県でも森林文化アカデミーにおいて、現場で働く人を養成してほしい。

また、歩掛りというものがあるが、以前よりも労働安全対策でやるが増えていることもあって、1日あたりの作業量は減っており、中々、賃金を払ってあげることができない。つらくて儲からないから次の人がいないということになる。林業は国土に密接にかかわってくる仕事であるため、途絶えることなく続けていくためには、地位向上や供給のシステムを考える必要があるのではないかと。

15：25 閉会